

# 高取焼東皿山窯跡推定地付近採集資料の検討

田中 康裕  
伊藤 慎二

## 1. はじめに

福岡県福岡市早良区西新5丁目9-16の住宅地空地の北西に向けて下る斜面に、近世の陶磁器小破片と窯道具類の散布が確認できる(第1図・第2図)。この周辺は、福岡藩の高取焼東皿山窯跡の推定地付近にあたる。高取焼東皿山窯跡は、これまで考古学的調査が未着手のため、詳細不明な部分が多い。そこで、当該地点で筆者が採集した現在西南学院大学博物館所蔵の窯道具類について資料紹介し、あわせて関連する問題について以下に論じる。

なお小論は、「はじめに」を伊藤慎二、そのほかはすべて田中康裕が執筆した。

## 2. 高取焼の研究状況

### (1) 西新以前

高取焼は、『筑前国続風土記』によれば、黒田長政(福岡藩初代藩主)が文禄・慶長の役(1592-1598年)の帰陣の折に、陶工八山<sup>はちざん</sup>ら<sup>はちざん</sup>を連れ帰り、焼かせたこ

とに始まる。現状、高取焼に関する研究は尾崎直人氏の研究(尾崎 2013)が到達点であるので、以下尾崎直人氏の研究をもとに高取焼の窯が西新に開かれるまでを概観する。

八山が最初に開いた窯は、発掘調査の成果と史料調査から直方市鷹取山南麓に位置する永満寺<sup>えいまんじたくま</sup>宅間窯と考えられている。窯は全長16.6mの地上式の割竹式登窯で、出土陶片から皿・鉢・甕・壺・播鉢などの主に日常雑器を生産していたことが推定される(尾崎 2013: 30-31 頁、副島・伊藤・時枝ほか 1983)。続いて慶長19(1614)年に、鷹取山北側斜面に開かれたのが内ヶ磯<sup>うちがそ</sup>窯である。窯は、全長46.5m・15室の階段式連房の登窯である。多量の出土陶片からうかがわれる製品は、茶入・茶碗・水指・向付などの茶陶関係の製品をはじめ、日常雑器など多岐にわたる(尾崎 2013: 33 頁、副島・木下 1982)。元和9(1623)年に黒田長政が没すると、八山父子らは黒田忠之(二代藩主)に帰国を願い出て怒りにふれ、嘉麻郡上山田村<sup>かま</sup>へ蟄居させられた。この期間中に少数の門弟と山田村で日常身の焼き



第1図 遺物採集地点の現状(第3図1)



第2図 遺物散布状況(第4図2)

物を焼いたとされるのが山田窯である（尾崎 2013：35-36頁）。

八山父子は山田窯における6年間の不遇な時期の後、寛永7（1630）年に許され、穂波郡合屋川内中村の白旗山北麓に新たな窯すなわち白旗山窯を築く。発掘調査では合計3基の窯跡が確認され、いずれも階段式連房の登窯である。窯床およびその周辺からは茶器のほか、日常雑器や大量の窯道具（匣鉢・ハマなど）が出土した。また生産の主体は茶器におかれていたと考えられている。この時期の茶陶は「遠州高取」と称される（尾崎 2013：37-40頁、嶋田・伊藤・時枝ほか 1992）。

寛文5（1665）年には上座郡鼓村に移り、新たな窯、すなわち小石原鼓窯を築く。発掘調査では残存長11m以上の階段式連房の登窯であることが確認された。出土遺物の多くは茶陶類で、匣鉢などの窯道具もみられる（尾崎 2013：42頁、日高 1994）。

続いて貞享年中（1684-1687年）には、早良郡田嶋村大鋸谷に御陶所を移した。20年にも満たない活動の後、元禄17（1704）年には廃窯となる。この窯の所在地は、現在の福岡市中央区輝国二丁目18番地と24番地の境目付近にあったと推測されている。宝永5（1708）年には荒戸新町に新たな窯が築かれるが、試し焼き程度に終わっている（尾崎 2013：42-45頁）。

## （2）西新（第3図）

西新の地に窯が築かれたのは享保元（1716）年のことである。早良郡麓原村上の山に東皿山窯は開かれ、明治4（1871）年の廃藩置県まで約150年という高取焼では最も長期にわたって活動した窯であった（尾崎 2013：45頁）。その間、寛保元（1741）年には西皿山窯が設けられる。西皿山窯に関しては、平成17（2005）年に福岡市教育委員会が行った藤崎遺跡第35次調査（松浦 2006）で物原を掘削した整地層が確認されたことで、窯の位置が裏付けられている（秦 2009：135頁）。近代以後にも生産を続ける窯があったが、現在は高取焼味楽窯のみが操業を続けており、登窯1基が現地に残っている。

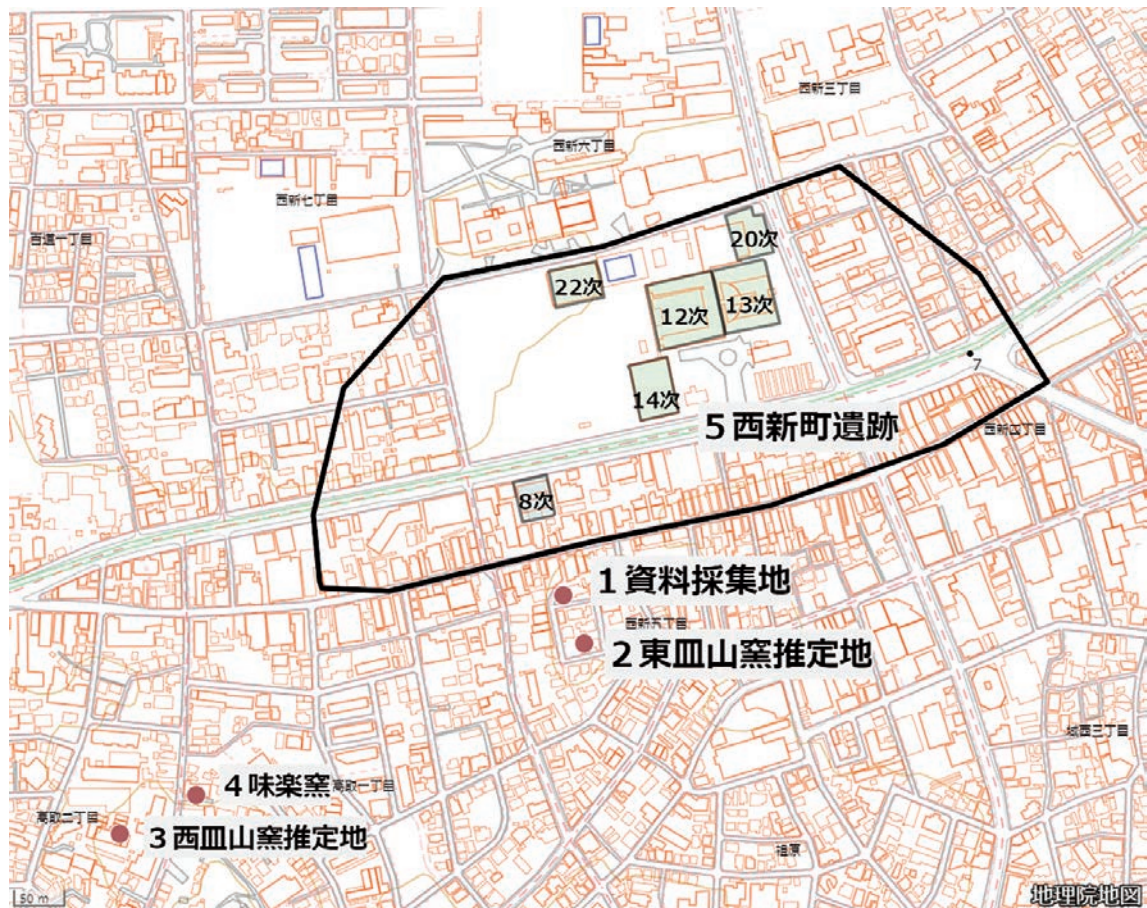
最も長い期間操業した東皿山窯だが、詳細不明な部分が多い。というのも、窯跡推定地にはすでに民間住宅が建ち並んでおり、考古学的発掘調査は未着手の状態にある。そのため、これまでの研究では、伝世品の検討と、文献史料の検討が主であった。

伝世するこの窯の製品の多さは操業期間の長さに比例している。その代表的製品が『福岡県史 文化史料編 筑前高取焼』（西田・尾崎 1992）に掲載されている。茶入・茶碗・水指・花入・香炉などの茶器のほかにも、生活全般にわたる多種多様な器類を作っていたと考えられている（西田・尾崎 1992：137頁）。こうした製品の細かな時期推定は、窯跡の発掘調査が未着手のため困難である。しかし、幕末の製品については㊦の刻印によって時期推定が可能である（尾崎 2013：46頁）。窯場近隣の西新町遺跡では、肥前系磁器と共伴した一括資料を基準に編年案が提示されている（秦 2009：135-142頁）。

一方、文献史料からは東皿山窯について詳細な部分まで窺い知れる。尾崎直人氏の研究（尾崎 2013）ですでに言及されているが、高取家に伝わる『高取歴代記録』によれば、寛保元（1741）年には茶陶を中心に焼成した東皿山窯に対して、一般庶民の日常雑器を焼成した西皿山窯が開かれたとある（尾崎 2013：46頁）。しかし、東皿山窯が大破した際に御用品は西皿山窯で焼成するようになったとされる（松浦 2006：4頁）。東皿山窯の規模については、窯の見取図を載せた文化13（1816）年の古文書から、窯の全長24mで、焼成室8室からなり、上方の焼成室幅6.3m、下方の焼成室幅2.5mと伝えられる（西田・尾崎 1992：137頁）。

このように、伝世品の検討と高取焼関連の文献史料の検討から、東皿山窯で焼かれた製品については断片的ではあるが明らかになっているといえる。しかし、東皿山窯における製品を焼くための生産技術に関しては不明確であり、さらなる検討の余地が残っている。

生産技術を知るのに重要な手がかりとなるのが、窯道具である。東皿山窯は発掘調査が未着手のため窯床や物原から出土した窯道具を欠くが、東皿山窯



第3図 東皿山窯と関連遺跡 ※国土地理院地図を一部改変して作成

跡近隣の西新町遺跡からは多量の窯道具および陶片が出土している。西新町遺跡は、出土遺物にみられる一次焼成品・不良品・通常流通しない製品などの存在から、窯場で務める工人が居住した集落であった可能性が示唆されている（秦 2009：142頁）。この点については、上述した多量に窯道具が出土する状況に関連するとみられる。

### 3. 採集資料の特徴

東皿山窯跡推定地付近の住宅地空地の北西に向けて下る斜面において、採集した窯道具と考えられる資料は第4図1・2の合計2点である。

第4図1は断面実測図をはさんで左側が内面、右側が外面である。

1はサヤ（匣鉢）と考えられる資料である。推定復元口径は18.2cmで、口縁部を含む上半部の断面形状は胴部から口縁部にかけて内傾する。全形は、

胴部から底部の下半部を欠き不明だが、おおよそ円筒形と考えられる。口唇部は平坦なつくりで、上端内面側はやや鋭く突き出る。内面の胴部にはロクロ成形時の凹線状の指押さえ跡が複数横位にみられる。厚さは1.1~1.3cmで、胎土中には4mm以下の微細な石英粒を多く含む。また、焼成時の被熱によりところどころおそらく石英粒が爆ぜた跡が複数確認できる。色調は内外面ともにやや赤みを帯びた茶褐色を呈する。使用方法については、次項で西新町遺跡出土の窯道具との比較を通して検討する。

第4図2は左側が上面、右側が下面、左側の下方が断面図である。

2は足（脚）付きハマと考えられる資料である。側面の一部が残っている。推定復元径は16.1cmで、上下面ともに表面の損傷が激しく、焼成時の使用痕というよりは廃棄後と考えられる後天的な傷が目立つ。焼成使用時の、例えば製品の高台の痕跡は不明瞭である。下面には足と考えられる直径1.4cmの粘

土粒が一ヶ所付いており、足の接地面はやや平坦な  
つくりである。高さ（厚さ）は2.0cm、足を含めると  
2.6cmである。胎土中には5mm以下の石英粒など  
の砂粒が多く含まれる。焼成時の被熱により爆ぜ  
た跡が残る。色調は上面中心が淡黄色、上面周縁と  
下面が白みを帯びた茶褐色、側面付近は赤みを帯び  
た淡茶褐色である。上面中心と周縁で色調が異なる  
ので、窯道具として使用時の被熱によって色調が変  
化したと考えられる。

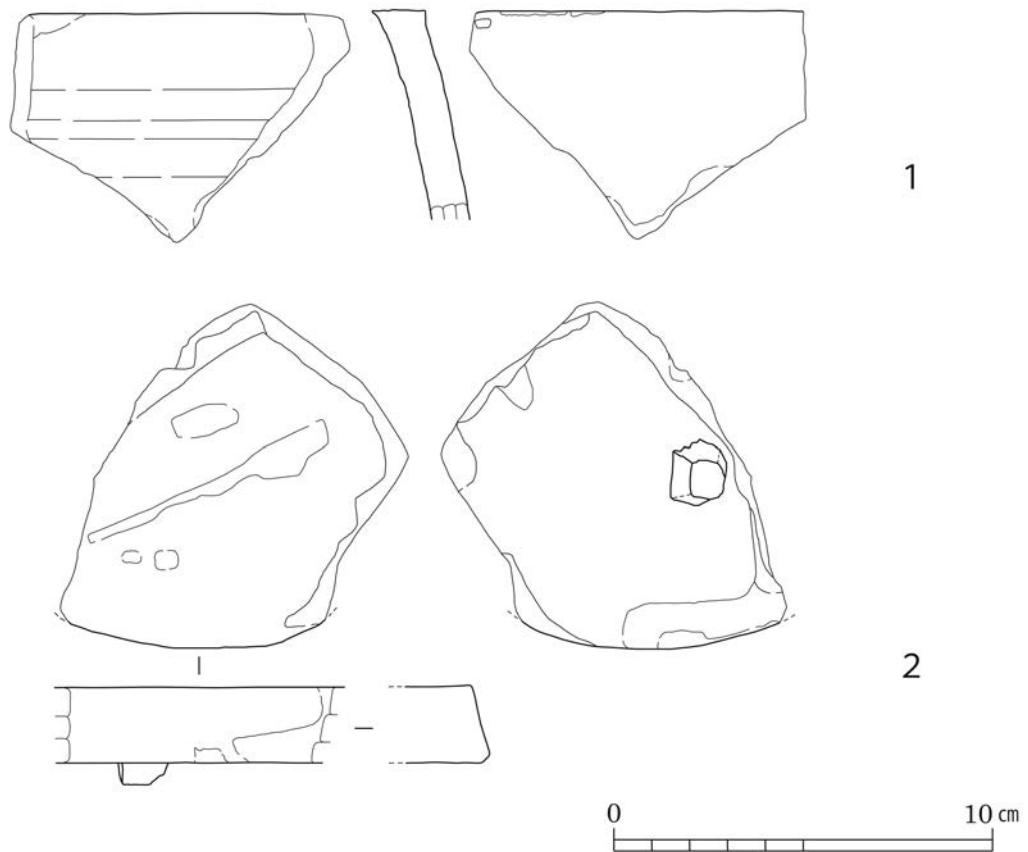
#### 4. 高取焼の出土窯道具類との比較

東皿山窯跡周辺には工人の居住集落としての性格  
が推定される西新町遺跡が広がり、窯跡で使用した  
とみられる窯道具類が多数出土している。第5図・  
第6図はその主要な窯道具類を筆者の分類別に基づ  
き、代表例を示した。同図は、基本的に報告書上で  
の分類にしたがったが、一部の資料については筆者

の観察結果と他遺跡資料の比較に基づき変更した。  
ここでは、西新町遺跡出土の窯道具類と、今回の採  
集資料を比較することで、さらなる考察を試みる。

まず、西新町遺跡出土の窯道具類の特徴について  
述べておきたい。窯道具の種類は、報告書上でのハ  
マ・トチンに加えて、筆者はサヤ（円筒形の窯道  
具）・チャツなどの窯道具類を新たに区別した。

ハマは形状の違いから、ハマ・足付きハマ・足付  
き環状ハマの3種類に分けられる。今回筆者は径を  
もとにこれらを再分析した。その結果、おおよそ大  
中小の大きさの違いが確認できた。ハマは、小  
（4.0～6.5cm）、中（7.0～9.0cm）、大（12.5～13.  
5cm）である。足付きハマは、小（6.0～7.5cm）、  
中（8.5～10.0cm）、大（11.5～12.5cm）である。  
足付き環状ハマは、小（5.5～6.5cm）、中（9.0～  
10.0cm）、大（11.0～12.0cm）である。足付きハ  
マは肥前窯で1780年代頃から使用されるようになっ  
た窯道具（大橋 2005：2頁）とされるため、西新



第4図 採集窯道具実測図 縮尺=1/2

町遺跡出土の足付きハマは1780年代以降のものと考えられる。しかし、足付き環状ハマの類例は、近世の瀬戸・美濃窯で足付き輪トチとして知られる例(大橋 2005)を除けば、九州の窯ではほとんど使用されていない窯道具とみられる。

トチンは大きさの違いから、大小に分けられる。第6図20は、報告書上では大形の焼き台とされるが、胴部がややくぼみ円柱形を呈すことから、トチンに類する可能性もある。

サヤは、西新町遺跡の報告書では円筒形の窯道具と分類されている。西新町遺跡では、ハマやトチンなどの窯道具類が出土しているが、サヤに相当する窯道具の報告はこれまでない。そこで、西新町遺跡出土の円筒形の窯道具と他遺跡資料の比較を行った。西新町遺跡の資料は、口径がおおよそ8.0~13.2cmで、高さが4.5~6.6cmである。これは、白旗山窯で出土した小形のサヤ(嶋田・伊藤・時枝ほか 1992:71頁)に近い大きさである。また、ロクロ成形時の凹線状の指押さえ跡が複数横位に確認できる点も類似する。さらに、高取焼東皿山窯の御用窯といった性格を考慮すれば、茶陶を焼成する際にサヤが用いられた可能性は高い。西新町遺跡出土の円筒形の窯道具とそれに類似する窯道具は、これら大きさ・形状の類似と窯の性格から、サヤとして区別できる可能性がある。

チャツについては、西新町遺跡の報告書では言及がない。西新町遺跡出土資料を観察した結果、大橋康二氏の研究(大橋 1992・2005)で取りあげられている、17世紀後半頃のかみ小石原中野のはる上の原窯などから出土したチャツと第6図の17は類似することが確認できた。そこで筆者はチャツと分類した。チャツは肥前窯では1650年代以降に現れた窯道具である。高台内の釉を蛇の目状に釉剥ぎし、釉剥ぎした部分にチャツを当て窯詰めする方法である。また、最初から高台内に釉をかけないものにも用いられた(大橋 1992:179頁)。

西新町遺跡出土の窯道具に関する以上の分類をもとに、今回の採集資料と比較する。第4図1の資料は、下半部を欠き全形が不明であるが、復元口径か

ら西新町遺跡のサヤまたは類似品よりも口径が大きい。これは、白旗山窯における一般的な大きさのサヤ(嶋田・伊藤・時枝ほか 1992:71頁)に近い大きさである。また、ロクロ成形時の凹線状の指押さえ跡が複数横位に確認でき、筆者が今回サヤとみなした西新町遺跡の資料と類似する。西新町遺跡のサヤまたは類似品は、底面を欠く形状から、ハマなどの焼き台を下に置きその上にサヤを据え、サヤの内側に焼成対象の製品を入れ、使用したのと考えられる。しかし、円筒形のサヤはそれ以前の高取焼の窯およびその他の九州の窯(大橋 1992・2005)では、ほとんど知られていない。このサヤは東皿山窯の特有の生産技術にかかわる可能性がある。

次に、採集した第4図2の足付きハマである。今回、過去の西新町遺跡の出土資料を観察したところ、通常の足を持たないハマの数と同程度に足付きハマが多くみられた。上述したように、足付きハマは肥前では1780年代頃から使用されるようになったので、肥前からの技術導入に関係すると考えられる。今回の採集資料も同様の年代以降と考えられる。

## 5. まとめと課題

今回、採集した2点の資料は、それぞれサヤと足付きハマであると考えられる。それらは高取焼東皿山窯の特有の生産技術にかかわる可能性が推察される。また、サヤの存在は、茶陶をサヤに入れて焼成した東皿山窯の御用窯としての性格にかかわる可能性がある。

今後は、他産地の窯で使用された窯道具との比較を蓄積することで、東皿山窯の生産技術について解明していきたい。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、以下の方々のご指導ならびにご教授を賜りました。

資料閲覧にあたり、九州歴史資料館の小川泰樹

氏・進村真之氏、福岡市埋蔵文化財センターの久住猛雄氏には多大なるご指導を賜りました。また、下園知弥先生をはじめとする西南学院大学博物館のスタッフの方々には多大なるご協力を賜りました。なかでも鬼束芽依氏には、懇切なご指導いただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

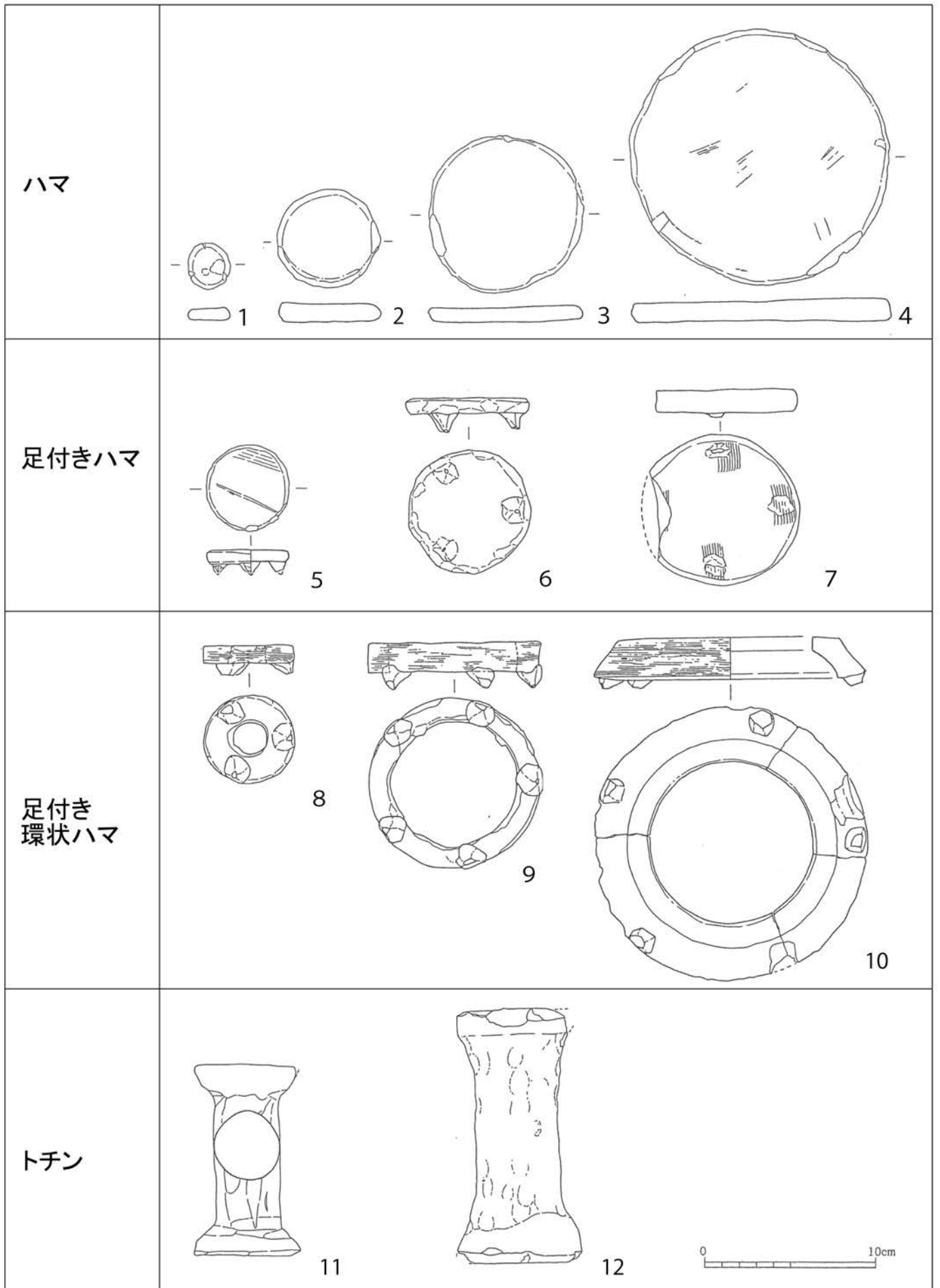
なお、今回報告した採集資料は、現在西南学院大学博物館が収蔵保管している。

#### 引用・参考文献

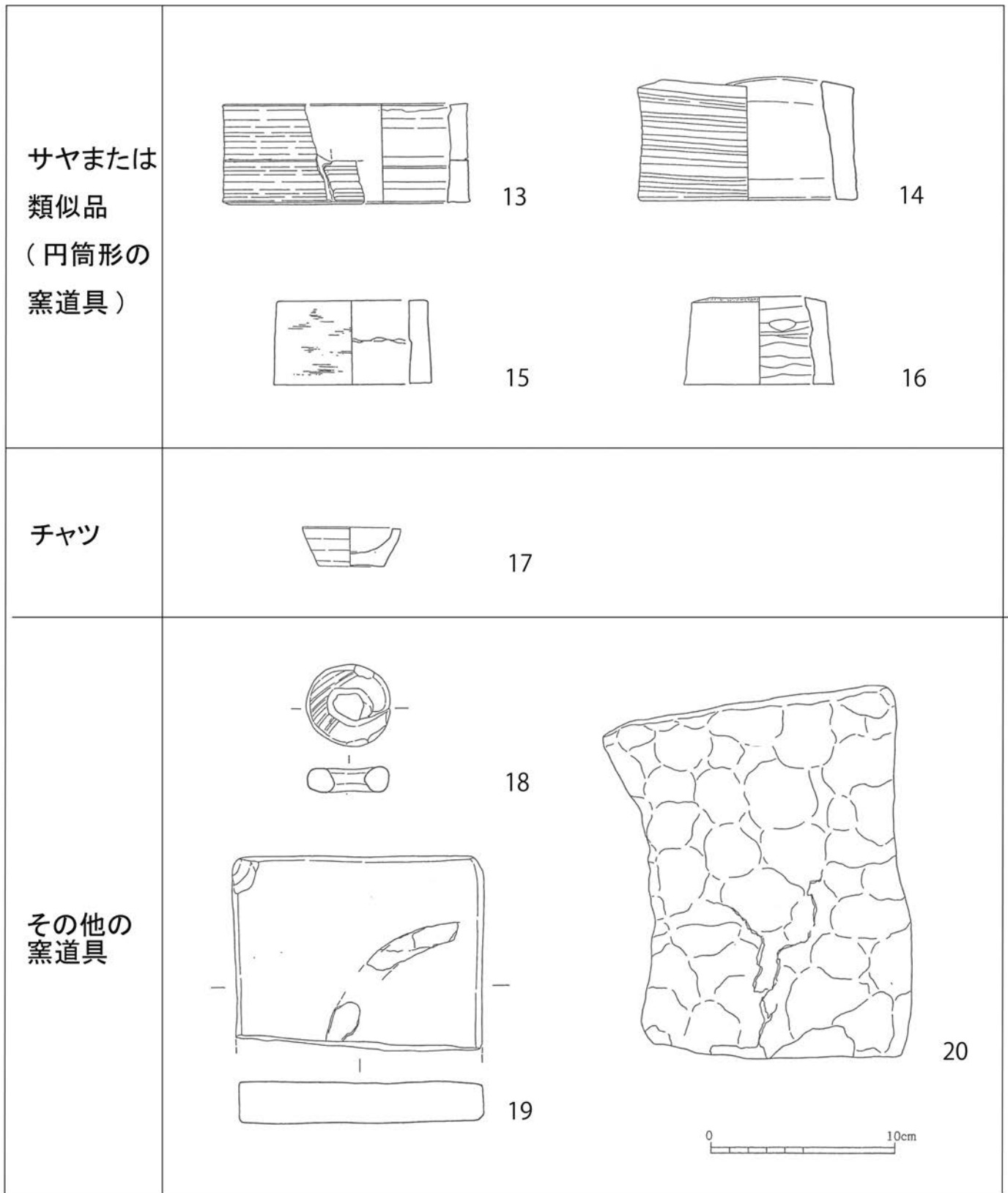
- 大橋康二 1992「福岡の陶磁—古窯跡の年代的位置づけ—」『福岡の陶磁』平成4年度特別企画展図録：176-185頁、九州陶磁文化館
- 大橋康二 2005「わが国の窯業における生産技術の展開」関西陶磁史研究会編『窯構造・窯道具からみた窯業—関西窯場の技術的系譜をさぐる—研究集会資料集』：1-9頁、関西陶磁史研究会
- 尾崎直人 2013『筑前高取焼の研究』福岡市美術館叢書5、海鳥社
- 坂元雄紀・吉田東明 2003『西新町遺跡Ⅴ』福岡県文化財調査報告書第178集、福岡県教育委員会
- 坂元雄紀・岸本圭・岡寺未幾 2005『西新町遺跡Ⅵ』福岡県文化財調査

- 報告書第200集、福岡県教育委員会
- 嶋田光一・伊藤晴明・時枝克安ほか 1992『遠州高取白旗山窯跡』飯塚市文化財調査報告書第16集、飯塚市教育委員会
- 下原幸裕・重藤輝行・吉村靖徳ほか 2009『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第221集、福岡県教育委員会
- 副島邦弘・木下修也 1982『古高取内ヶ磯窯跡』直方市文化財調査報告書第4集、直方市教育委員会
- 副島邦弘・伊藤晴明・時枝克安ほか 1983『古高取永満寺宅間窯跡』直方市文化財調査報告書第5集、直方市教育委員会
- 西田宏子・尾崎直人 1992『福岡県史 文化史料編 筑前高取焼』、西日本文化協会
- 秦健二 2009「第2章近世・近代篇」下原幸裕・重藤輝行・吉村靖徳ほか『西新町遺跡Ⅸ』福岡県文化財調査報告書第221集：135-158頁、福岡県教育委員会
- 日高正幸 1994『鼓釜床1号古窯跡』小石原村文化財調査報告書第5集、小石原村教育委員会
- 松浦一之介 2005『西新町遺跡8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第846集、福岡市教育委員会
- 松浦一之介 2006『藤崎遺跡17』福岡市埋蔵文化財調査報告書第916集、福岡市教育委員会
- 森井啓次・重藤輝行・大庭孝夫ほか 2001『西新町遺跡Ⅲ』福岡県埋蔵文化財調査報告書第157集、福岡県教育委員会
- 吉村靖徳・齋藤努 2008『西新町遺跡Ⅶ』福岡県文化財調査報告書第218集、福岡県教育委員会

田中 康裕 (たなか やすひろ) 西南学院大学大学院 国際文化研究科 博士前期課程  
伊藤 慎二 (いとう しんじ) 西南学院大学博物館館長・国際文化学部教授



第5図 西新町遺跡出土の窯道具分類別代表例1 縮尺=1/3 ※出典は第6図にまとめて記す



【出典】

- |                      |                       |                       |
|----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 下原2009：61頁第44図11   | 8 坂本2003：149頁第89図6    | 15 坂元2003：149頁第89図10  |
| 2 下原2009：61頁第44図13   | 9 坂本2003：149頁第89図7    | 16 吉村2008：132頁第121図5  |
| 3 下原2009：61頁第44図18   | 10 坂本2003：149頁第89図11  | 17 森井2001：193頁第405図4  |
| 4 下原2009：61頁第44図21   | 11 森井2001：193頁第405図16 | 18 森井2001：193頁第405図7  |
| 5 森井2001：193頁第405図13 | 12 松浦2005：29頁図48、130  | 19 森井2001：193頁第405図19 |
| 6 坂本2003：149頁第89図4   | 13 吉村2008：132頁第121図6  | 20 坂元2003：150頁第90図12  |
| 7 坂本2003：149頁第89図5   | 14 坂元2005：174頁第133図25 |                       |

第6図 西新町遺跡出土の窯道具分類別代表例2 縮尺=1/3 ※筆者の分類に基づく